【土木史研究　第22号　2002年５月　審査付論文】

静岡県牧之原台地に残る土居について*

Study on "DOI" remained at Makinohara-daichi in Shizuoka prefecture

二村　悟**

By Satoru NIMURA

At Makinohara-daichi in Shizuoka prefecture, tea was cultivated by the immigrant and reclamation of "Samurai" from 1869. This area is the oldest field of tea production in this prefecture and supported drastic increasing of tea production during Meiji period. Almost all residences had "DOI" in this area during Meiji period, but there are few reports about "DOI", especially focused civil engineering and architectural history as structure. In this study, the author reported "DOI" remained at Makinohara-daichi and elucidate the building process from the reports. In this result, "DOI" can be evaluated as the modern civil engineering heritage although it is thought that "DOI" was not influence on the modernization of the tea industry.

1. はじめに

静岡県の中西部境に位置し、茶の産地として名高い牧之原台地[1]（以下、「牧之原」と言う）では、茶の生産者が「土居（ドイ）」と呼ぶ外溝設備がかつて住居の周囲に築造されていた。

牧之原での土居は、「御土居」[2]のように大規模ではなく、中～近世にかけて中国・四国地方の地主屋敷に見られた「土居構え」に共通する小規模なものである[3]。

本稿は、静岡県の茶産業建築の近代化過程に埋もれた歴史の断片を明らかにすることを目的とした研究の事例として、牧之原に見られた「土居」に着目する。その目的については、前稿[4]で触れたように学術的には注目されず、研究も行われていないためである。

同時に、城郭の一部としての認識が強い土居を、近代土木遺産として位置付けることを目指すものである[5]。

2. 土居の分析と類型化

土居は、ほとんど現存しないが、かつては牧之原のほぼ全域に見られた。先行研究『牧之原開拓史考』（以下、『』内は後掲の参考文献とする）を記した故大石貞男氏[6]によると、同著を記した1974（昭和49）年頃には例外の無いほど土居が旧開墾者の住居に見られ、大半は建物が無く、土居だけが残っていたという[7]。

現在、牧之原に残る土居は、管見の限りでは本稿で紹介するもの以外には見られない。以下に、確認された土居を見てみよう。

*keywords;茶産業　明治期　開墾入植　外溝設備
**正会員　工修　工学院大学工学部建築都市デザイン学科研究生
（〒242-0007　神奈川県大和市中央林間3-25-22）

(1) 現存する土居

現存が確認された土居は以下のものである。

相良町の旧士族・三田章五郎邸跡（現・樽林禮一邸）：**A-1**［写真-1～2］、金谷町志土呂の跡地（塚本三一郎家所有地）：**A-2**［写真-3～5］、同町の荒地：**A-3**［写真-6～7］である。

(2) 古写真に見る土居

資料から確認できた土居は以下のものである。

牧之原の茶畑や茶摘みの様子を撮影した古写真は多いが、建物を写したものはほとんどない。その中で、『牧之原開拓史考』から旧士族の土居2例が確認できた。多田為之助の住居跡：**B-1**［写真-8］、原田義利の住居跡：**B-2**［写真-9］である。

(3) ヒアリングによる土居

ヒアリングでは土居の存在が幾つか確認されるが、全体像が把握できないため、当時の様子が伺えるもののみを取り上げた。

ヒアリングから確認できた土居は、菊川町の平民（豪農）・旧丸尾文六邸：**C-1**、小笠町の平民・長谷川卓郎邸：**C-2**［写真-10］である。

C-2は部分的に現存するが、当時の様子を知るにはヒアリングによる他は無い。

(4) 牧之原周辺地域における土居の存在について

1878（明治11）年7月16日に丸尾文六（**C-1**）が静岡県第二課に提出した「布引原開墾の起源」には、「御説拙者の所有反別百二十一町二十四歩是迄開墾入費概計一万八千有

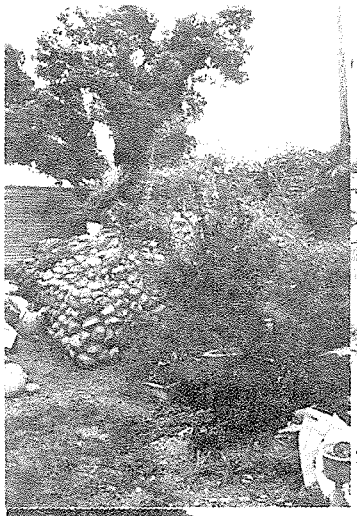


写真 -1　A-1（1996）

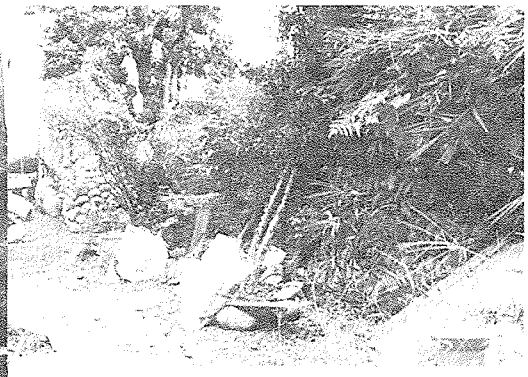


写真 -2　A-1（2000）

写真 -3　A-2全景（2000）

写真 -4　A-2中央部を見る（2000）

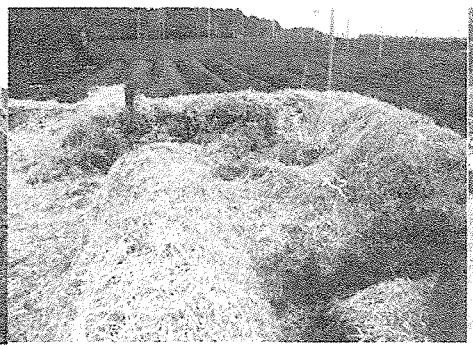


写真 -5　A-2中央部を見る（2000）

写真 -6　A-3（2001）

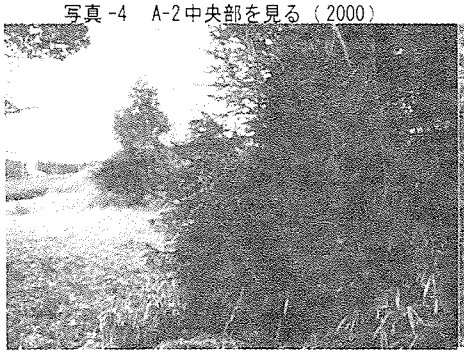


写真 -7　A-3土居の対岸の杉が見える（2001）

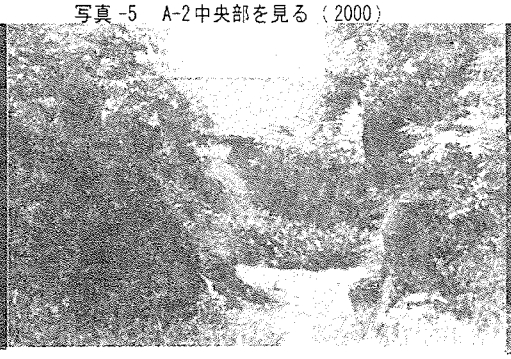


写真 -8　B-1（掲載：『牧之原開拓史考』）

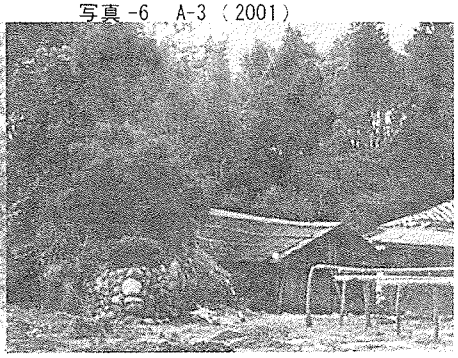


写真 -9　B-2（掲載：『牧之原開拓史考』）

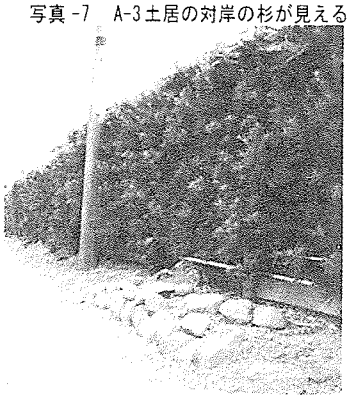


写真 -10　C-2（1996）

写真 11　田んぼの縁に土塁（掲載『民家は語る』）

写真 12　A-2の雑草接写（2002）

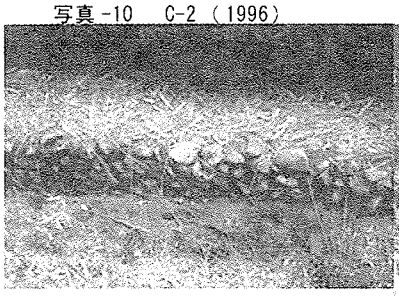


写真 13　A-2の石垣を土居から見る（撮影：松山哲則、2002）

写真 14　A-2石垣の接写（2002）

写真 15　A-2の石垣内部の間積め石（2002）

写真 16　旧児島直養家の石垣（2001）

※撮影者無記名は筆者による。
※（）内は撮影年度。
※写真 8～11は、対象部分を中心にトリミング。

余円にして、本年初めて雁皮、楮、結香を植え、是迄道を開き、土居を築き、松を植え、薄を植ゆるの手数」[8]と、当時から土居の存在が確認できる。同時に土居が当時より用いられていた言葉であることもわかる。

牧之原周辺における「土居」の存在は明らかではないが、同じように茶の開墾に従事した人々が浜松市の三方原台地で「土手」と呼ばれるものを築いたという[9]。

『民家は語る』によると、牧之原東南の大東町では冬の西風が強く、昔から家の廻りに槙囲いが発達し、その外側に「土塁」が築かれているという。同町の伊藤敏雄邸［写真-11］には、槙囲いの下に土塁が確認できる。[10]

以上のように、土手や土塁など、土居に類似する外溝設備の存在は、周辺地域でも確認される。

3. 築造年代の考察

土居の築造年代は以下のものが牧之原への入植年によって上限が定められる。

A-1、**B-1**、**B-2** は、旧士族の居宅跡である。旧士族は最初の入植者で、1869（明治 2）年に新番組、次いで翌年に彰義隊が入植している[11]ことから 1869(明治 2)年、**C-1** は大井川の川越人足を率いて入植しているため 1871（明治 4）年[12]、**C-2** は記録等から 1879（明治 12）年[13]である。

また、**A-2**、**A-3** もヒアリングによると旧士族の跡地とされ[14]、この点では 1869（明治 2）年が上限となる。なお、『牧之原開拓史考』等によると、平民が本格的に入植するのは 1877（明治 10）年頃からであるが、旧士族が入植した 2～3 年後の 1872（明治 5）年前後になると、旧士族は周辺の平民に請負開墾をさせるようになる[15]。

下限は、**A-1** が 1877（明治 10）年頃[16]と推定される。また、**B-1**、**B-2** は旧士族であり、平民（豪農）の丸尾文六よりも早く開墾入植しているため明治 4 年。**A-2**、**A-3** も旧士族とされるため同様である。**C-1** は、「牧之原開墾の履歴」から、土居が確認される 1883（明治 11）年以前と推定できる。

A-2、**A-3** は共に旧士族の跡地とされているが、入植地図との照合調査の結果[17]、士族の名は明らかにされていない。このため上限、下限とも正確には不明である。

A-2 は、以下の理由から旧士族の跡地の可能性が高い。①所有者の父・良一郎が、1872（明治 5）年に父・市右衛門（大正 4 年没）からこの土地を相続しているため、1871（明治 4）年頃には購入していたと推測される[18]。購入以前に牧之原に入植しているのは旧士族だけである。②伝承では、旧士族の新番組[19]が茶の開墾に入植したものの失敗し、すぐに辞めてしまった住居跡だとされる[20]。③土居の周囲に茶畑を持つ人々によるヒアリングからも、旧士族の跡地であったと伝えられている[21]。

1869（明治 2）年の旧士族入植以前は、牧之原の居住者はほとんど存在しないため[22]、江戸期に土居は見られなかったと考えられる。確認された土居も江戸期に遡るものはない。このため、牧之原で土居が見られるようになったのは、旧士族の入植以降であると考えられる。

4. 土居の配置形状と規模

土居の特徴をまとめたものが［表 1］である。

築造年代から、土居が普及した時期は、明治期であることがわかる。以下に土居の特徴を触れてみたい。

配置形状については、**A-1**[23]、**A-2**［図-1］、**B-1**［図-2］が住居を囲うように配されている。

A-1、**B-1** は所有者が旧士族であり、住居を囲い込んだ土居の中央部に出入口がある。**A-3** は囲い込んではいないが、［写真-7］のようにコの字型に近い L 型である。

C-1、**C-2**［図-3］は一直線である。**A-1**、**A-2**、**B-1**、**B-2** の旧士族の土居が住居を囲むように配置されることに対して、**C-1**、**C-2** の平民は住居から付属屋を挟んで離れた場所に一直線で位置している。

高さと配置形状については、『牧之原開拓史考』に「やしきの周りに一方もしくは二方に入口は設けてあるが、幅 2.5～3m、高さ 1.5m～1.8m内外の土るいをめぐらしたもの」[24]と記されている。

故大石貞男氏によると、この値は同書執筆時の昭和 40 年代に現存していた旧士族の土居を測定した平均値（以下、「平均値」と言う。）であるという[25]。

ここで改めて **A-2** を見ると、南側中心部に切れ目があり、東西の土居が互い違いになっている。どうやらこの中心部が居住地への出入口であり、**A-2** の土居に囲まれた部分には住居があったといえるだろう。

高さについては、**A-1**、**A-2**、**B-1**、**B-2** が 1.5m以上である。**A-2** を除く 3 つが旧士族のものと断定できる。

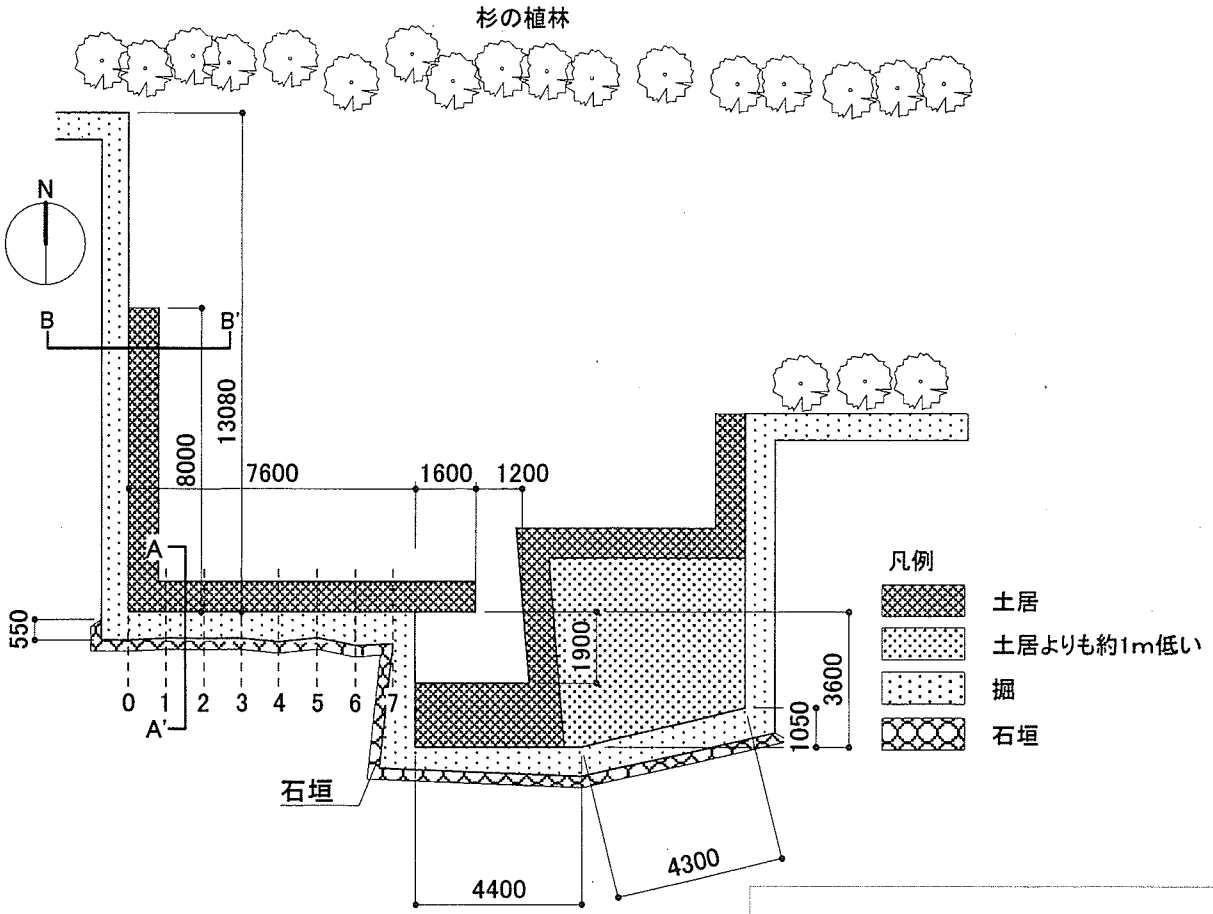
A-2 も配置形状を含めると、やはり旧士族のものであるといえるだろう。このため、1.5m以上の大きなものは、旧士族の土居であったと考えられる。

A-3 は、高さは平均値より低いが、配置形状が L 型のため、囲い込む土居の一部分が残った可能性が高く、こ

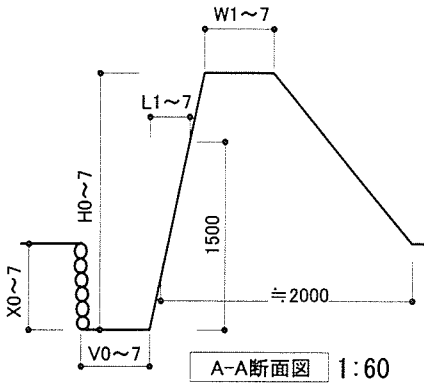
表 1　確認された土居一覧

	上限年代	職種	幅	高さ	配置形状	長さ	材料	勾配	植栽	備考
A-1	明治 2 年の入植時	士族	2.5m	1.5m	コの字	-	石積	88 度	無	古井戸
A-2	明治 2 年の入植時	士族	2.0m	1.6m	コの字	-	盛土	81 度	無	空掘り
A-3	明治 2 年の入植時	士族	2.5m	1.2～1.4m	L字	10m	盛土	60 度	有(杉・山椿)	
B-1	明治 2 年の入植時	士族	1.8m	1.5m	コの字	-	盛土	-	有	
B-2	明治 2 年の入植時	士族	1.8m	1.5m	-	-	石積	80 度	有	
C-1	入植した明治 4 年	平民(豪農)	2.5～3.0m	30～50cm	直線	-	盛土	-	有(松・山椿)	
C-2	入植した明治 12 年	平民	2.7m(1m)	90cm(数 10cm)	直線	27m	盛土	80 度	有(松・椎)	地の神様

※(　)内は現状。※[-]は不明。※勾配については、おおよその数値である。※B-2 の勾配は写真からの分析。
※C-2 の勾配は、所有者・長谷川卓郎氏(大正 15 年生)の教示(2002 年 1 月 14 日,電話にてヒアリング)。



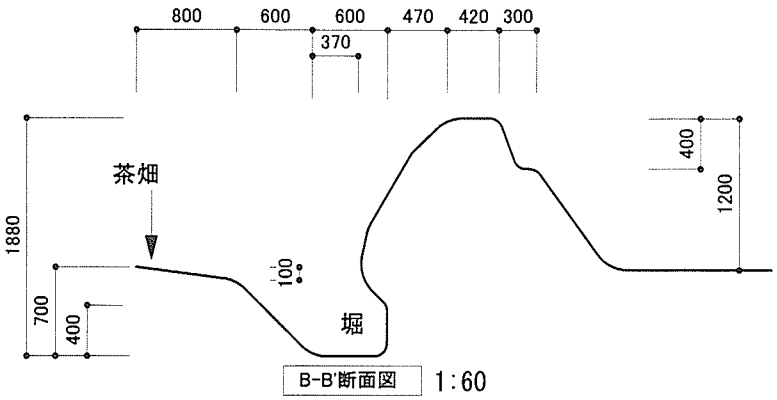
配置図　1:500



A-A断面図　1:60

A-A'断面寸法一覧表

	X	V	L	H	W
0	750	433	300	1920	
1	700	431	410	1850	850
2	700	426	320	2050	550
3	700	419	350	2250	550
4	800	412	350	2420	450
5	690	412	380	2370	600
6	890	411	340	2390	700
7	850	413	310	2370	700



B-B'断面図　1:60

図-1　A-2配置図　A-A、B-B断面図

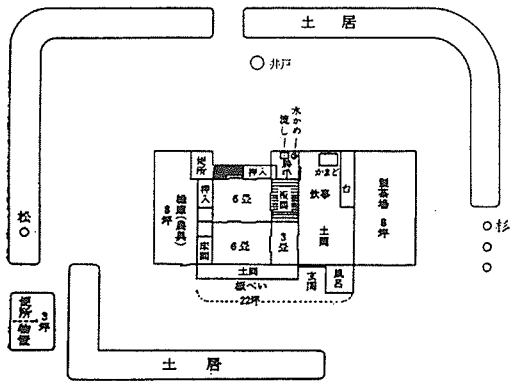


図-2　B-1配置図
『牧之原開拓史考』より転載
※方位不明

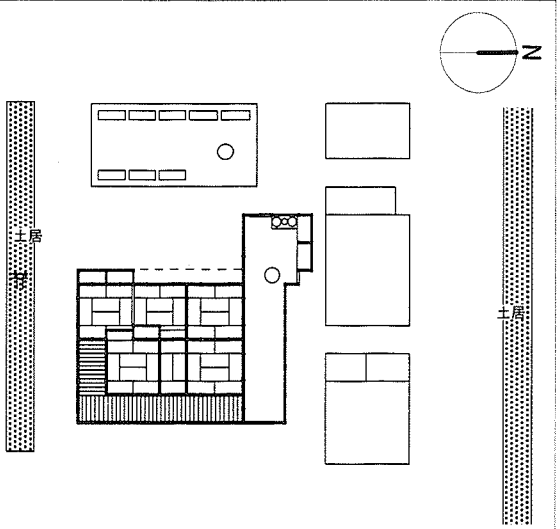


図-3　C-2配置図

のためA-3も旧士族であったと考えてよいだろう。

C-1、C-2は、他の土居よりも低い。この点からみると、平民の土居が低いことがわかる。

幅については、A-2、B-1、B-2が平均値よりも少し狭いため、旧士族や平民に違いは無いことがわかる。

牧之原周辺には風除けとして土塁や土手が発達しているが、以上のようにC-1、C-2の状況は［写真-11］に似る。この点から見ると、この2例は旧士族の土居とは性格が異なると考えてよいだろう。

5. 土居の材料と工法

土居の材料は、大別して盛土と石積みの2種類である。以下に、それぞれの特徴について触れてみたい。

(1) 盛土の土居について

盛土の土居は、A-2、A-3、B-1、C-1、C-2である。特に、現存するA-2、A-3は共に自然に放置された状態であるが、状態には歴然とした差を見て取れる。A-2、A-3を中心に以下に分析を行う。

勾配については、［表1］によるとA-3が他の2例と比べて緩いことがわかる。

構造・材料については、A-2は主材料に粘性土を用いて打ち固めたもので、形としてはほぼ完全な状態で現存している。

A-3は砂質土で築造され、風雨による侵食が激しい。配置形状が把握し難く、高さが平均値よりも若干低いのはこのためであろう。勾配についても同様である。このように、A-3も旧士族であったと考えて良いだろう。

A-2には植栽は無いが、根の張る雑草［写真-12］が生い茂っている。雑草は、地下茎が太く大きな株を作るススキを中心に、地下茎が横に這って広がるミヤコザサ、シダ類が大半を占めている。［写真-12］からは、植生密度の高さも伺える。

このような急勾配の土居が現在まで生き長らえた背景には、こうした雑草の存在が挙げられる。

急勾配を保つ芝土居[26]のように、土居を覆った雑草によって必要以上の侵食を防ぐことができたのだろう。

植栽については、A-3、B-1、C-1、C-2に見られる。A-3が杉と山椿、C-1が松と山椿、C-2が松と椎である。

ところで、A-2の廻りには他の土居には見られない掘がある。雨水を、水勾配を取った西側に流す水路として掘られた側溝である。石垣の使用や土居との関係から現状は小さな空掘りのようである。空掘りであれば、存在自体が武士の名残とされることが多いが、空掘りにしては規模が小さい。管見の限りでは堀を持つ古い住居は牧之原に確認されず、堀に石垣が用いられた事例も見られない。この点については加えておきたい。

(2) 石積みの土居について

石積みの土居は、旧士族のA-1、B-2である。以下に分析を行う。

勾配と頂部の幅については、A-1は88度の勾配で法面を約700mm上がり、そこから28度の勾配で土居の山を構成している。B-2は80度の勾配で法面を約800mm上がり、土居の山を構成する。

植栽については、B-2に見られるが樹種は不明である。

石積みの工法については、A-1、B-2は共に自然石を積んだ野面積みである。野面積みは本来、大小様々な石を組み合わせて用いるが、A-1、B-2では比較的大きさの揃った石が使用されている。一般的には、表面が平となるように施工されるが、A-1、B-2は丸みを帯びた山石が使用され、表面には凹凸がある。特にA-1の中間部分は無造作に積み上げられており、凹凸も激しい。

石の大きさについては、城郭のものに比べて小さく、施工性は良い。石の奥行は深くないが、縦長に石を積んだものも見られ、必ずしも表面積が最も多い部分を表面に出しているわけではないことがわかる。

(3) 石垣について

A-2の堀に見られた石垣を事例として紹介しよう。石垣は、新しいものは牧之原でも見られるが、A-2［図-4］［写真-13～15］と旧士族・児島直養邸［写真-16］に比較的古いものが見られる。

A-2の周囲には土居に沿って掘が廻り、［写真-14］のように正面の対岸にだけ、山石を積み上げた野面積みの石垣が見られる。

石の大きさについては、A-2の中心となる部分の正面（約50m四方）の平均が220H×150W×50D（mm）である。間積め石［写真-15］は、4個の平均が120H×70W×40D（mm）である。

［写真-13］のように、最上部には比較的平な石が用いられているが、正面部分には表面積が広い石ばかりでなく縦長の石も混じっており、目地も深く揃っていない。こうした点から見ると、玉石積みにも似る。

勾配については、A-2はほぼ直角（88度）［図-4］で、自然の石をそのまま積み上げたために目地の隙間が深い。

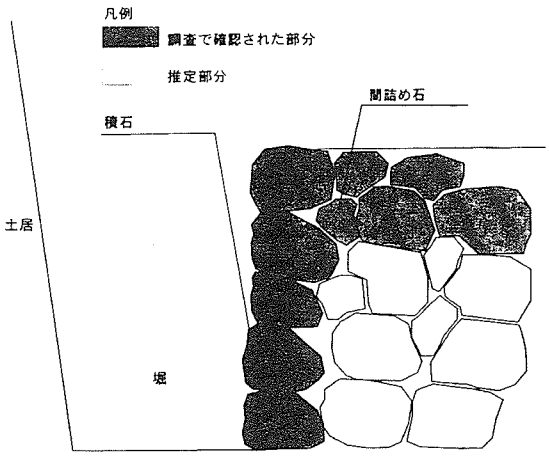


図4 A-2石垣の断面図

築造時期については、上限でどこまで遡るかは不明である。ヒアリングでは、旧士族が入植当時に築いたものと伝えられるが、少なくとも所有者が知る頃には築造されていたという[27]。A-2 周辺でのヒアリング調査からも同様の結果を得た[28]。このため、少なくとも大正末期～昭和初期頃には石垣が築造されていたと思われる。

(4) 盛土と石積みの比較

以上に、土居の分析を行った。結果について、以下にまとめてみたい。

材料については、盛土は4件中2件が旧士族、石積みは2件とも旧士族であった。盛土の土居は、居住者による明確な差がないが、石積みは石垣を含めて旧士族を中心に見られたことが伺える。

勾配については、[表1]に見るように旧士族と平民に区別がない。『城の日本史』によると、土居の勾配は75度が最も安定するという。この点から見ると A-3 以外は全てが不安定な要素を持つことになる。

野面積みは、一見雑然とした積み方だが、排水性に優れ頑丈である。丸みを帯びた石を用いることも利点がある。丸みがあることで、上の石の荷重を重心に近い位置で受けることができ、石を乗せる角度を気にしなくても比較的安定した状態が保てる。しかし、極端に緩い勾配では安定した状態は保てない。石に丸みがあるため、重心が上下に積んだ石の間で大きくずれると、積み上げること自体が困難となる。同様に、垂直に近い勾配も丸みの中心だけが重なり合うため安定しない。

A-1 や B-2 は、一見すると粗野に積み上げられているが実は微妙なバランスを保っている。A-1 が、人為的に壊された部分を除いて現在まで残ったのは、バランスによって支えられた積み方にあるといえるだろう。

目地には、茶葉が堆積した腐葉土が敷き詰っており、積み方は雑だが水はけが良く、クッションのような役割を担って崩れ難い構造を支えている。

このように、牧之原の土居は明治初期の築造ということもあり、特別な技法を見出すことは難しい。

6. 牧之原での土居の発生

(1) 発生の背景について

最後に、牧之原で土居が発生した理由について考えてみたい。土居が必要とされたのは何故だろうか。発生した理由として、『牧之原開拓史考』やヒアリング調査から以下の説が挙げられる。

①牧之原北部に「猪土居(ししどい)」という地名があり、猪や狐を防ぐ意味があった。

②牧之原に最初期に開墾入植したのは旧士族であり、武家屋敷の土塀など、慣習的なものがあった。

③旧士族は落武者であり、明治維新後も狙われることがあったために、防御策として築いた。

④牧之原は風が強いため風除けや防寒の意味があった。

(2) ①の検証

約120年前、猪や鹿が出没し、農作物を荒らした記録があるという[29]。農作物を守るために畑の周りに高い土居を築いて猪の害を防ぎ、それが地名として残ったとされている。

畑を囲むような土居があれば、動物避けと考えることは可能である。現在までに確認された土居の全てが住居の周囲とは言えないが、少なくとも畑の周りを囲っている事例がないことは明らかである。狐が出没した事実はあるため[30]、仮に獣除けと考えた場合、狐が手間をかけて土居を築造するほどの猛獣とはいい難い。

(3) ②の検証

『牧之原開拓史考』によると、旧士族は帰農しても武術を怠らず訓練を続け、道場を設けて平民の子弟に教えたという[31]。確かに彼らは「帰農武士」であり、入植直後に武家屋敷を模して土居を築いたとも考えられる。旧士族の子孫・森猛男氏[32]によると、幕臣時代に居住していた武家屋敷の塀を模して築造することで、旧士族としての威厳を保った人々もいると伝えられているという。

しかし、土居は旧士族の住居跡だけで無く、平民にも見られたことから、一概に武家屋敷の土塀に対する慣習だとはいえない。

(4) ③の検証

故大石貞男氏によると、旧士族が入植した1869(明治2)年は明治維新直後の動乱期であり、彼等は第15代将軍・徳川慶喜を護衛してきた精鋭隊(後・新番組と改称)であるため[33]、幕府側の彼等が皇軍に狙われる可能性があったという。

構造的に見ても住居に用いるものとしては幅や高さが大きく、少なからず敵を意識していたことは伺える。

(5) ④の検証

A-1 では「風が怖くて土居を造った」と伝えられ[34]、C-2 では「入植当時、風が強く何もかもが吹き飛ばされるため、風除けとして地面を削り、西と東に土を積み上げて土居を造った」[35]と伝えられている。

確かに牧之原は風が強く、特に冬季は「遠州のからっ風」と呼ばれる西北風(季節風)の強い場所である[36]。

風の強さは気象データによっても裏付けられる。静岡県内の6つの測定地点(静岡市、浜松市、三島市、網代、御前崎、石廊崎)における年平均風速は、御前崎が最も

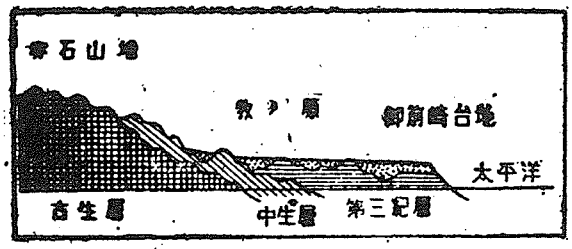


図5 西部非火山地域(『わが郷土 静岡県』転載)

強く 5.0m/s である。月別に見ても冬季に該当する 11 月から 3 月までは、2 番目の石廊崎を 1m程上回る。[37]

［図 5］の位置関係のように、牧之原は御前崎と直結しており、風の影響も特に大きい[38]。

入植時の牧之原は、馬の放牧場や野草の刈り取りが行われる程度の雑木やススキしか生えていない平坦な荒地で[39]、入植者の住居に強風が直接吹き付ける状態であったことは容易に想像できる。

7. 土居の用法について

以上、諸説の検証を試みた。どの説も元々伝承されてきたもので否定する必要は無いが、発生した理由として可能性が高いものを探ってみよう。

①説については、畑を囲むように土居が設けられている事例が得られなかった。

②③説については、旧士族の住居だけでなく、平民にも土居が確認されている。

④説については、**A-1**、**A-2** のように風除けとなる植栽がないものもある。

このため、どの説も用法を明らかにするまでには至らないが、分析結果だけを見れば、風除けとする④説が有力である。風を除けるためだとすれば、その用法を裏付ける上で、配置形状を改めて見直す必要があるだろう。

旧士族は、明らかに住居を囲い込んで土居を配している。平民は、住居とは少し距離を置き、その形状も直線である。配置形状からいえば、旧士族は武家屋敷に見られたような土塀を思わせ、平民の土居は風を除ける防風帯のようだ。もし、②説のように土塀を模したとすれば、③説のように皇軍から身を守る意味もあっただろう。旧士族と平民の土居に配置形状の違いが見られたため、用途も風除けだけであるとはいえない。

単純な風除けであれば、牧之原周辺に見られる槙囲いを施せば良いはずである。槙囲いにも **C-1** のように小規模な土手や土塁が確認されている。

また、旧士族の土居である **A-1**、**A-2** には風除けとなるべき植栽が無い。**B-1**、**B-2** には植栽が見られることを考えれば一概に土塀を模したとはいえないが、単に風除けであるともいえない。

ところで、「土居」という呼称は、1878（明治 11）年の「布引原開墾の起源」によっても当時から用いられていることがわかる。周辺地域同様に風除けであったとすれば、呼称は「土塁」や「土手」でよかったはずである。「土居」が主に城の堀端に見られるものである点を考慮すると、やはり当初は入植した旧士族による武士の名残であった可能性が高いといえるだろう。

更に、旧士族は平民よりも約 10 年早く開墾入植している。また、平民は 1872（明治 5）年前後から旧士族に茶畑の管理を任されており、平民が必要性に駆られて土居を風除けへと用途を切り替えた可能性は高い。

加えて、旧士族が土居を築いた期間は 1872（明治 5）年前後までとされ、平民の土居の起源は旧士族に由来する。この点から見ると、少なくとも平民が土居を風除けへと変化させたことは間違いないだろう。

以上のことから、土居が発生した理由を配置形状に見ると、旧士族の発祥は②③説により、時代と共に平民によって④説が持ち込まれたのだといえよう。

8. 静岡県の茶産業と土居との関係について

牧之原の茶産業についてヒアリング調査を行うと、しばしば「土居」という用語は古老から得られる。茶の栽培のために開墾入植した旧士族によって持ち込まれて以降、「土居」という呼称は現在まで受け継がれている。つまり、土居の存在が明治期の静岡県の茶産業とともに始まっていることは事実である。

では、静岡県の茶産業建築の近代化過程との関係についてはどうか。

例えば、幼い茶木を風から守るために畑に土居が必要であったという背景が得られれば、茶産業建築に関与する外溝設備として近代化過程の一部といえるだろう。

また、茶産業を行う上で、土居が製茶作業や茶摘みなどに必要とされる設備であれば、茶産業建築の近代化過程の断片として位置付けることもできただろう。

しかし、土居は用法こそ多少の変化を見せたが、その変化は茶産業の近代化による影響ではない。

こうして見ると、静岡県の茶産業と茶産業建築の「歴史」の断片として位置付けることは可能だが、本稿での事例を見る限り、茶産業建築の近代化過程においては関係性が薄いといえるだろう。

9. 結び

以上のように、1869（明治 2）～1872（明治 5）年前後の旧士族の土居は、配置形状、高さ、構造等から、伝承のように武士としての誇りが込められていたといえる。また、牧之原に現存する土居は、茶の開墾を行った旧士族から生じていることも明らかとした。

本稿の事例を見る限り、土居自体が近代化する様子は認められないが、管見の限りでは報告した土居以外に当時の面影を残すものは存在しない。風除けとしての土居も同様である。つまり、昔ながらの住居と土居が揃った姿を保つものは皆無といえる。もし、この姿を保つものが現存するならば、それは貴重な土木遺産といえよう。

土居は、どの形態も単調な相似形といえ、他の土木遺産に見られるような特徴ある築造形態を持たない。ただし、明治期の静岡県の茶産業に直接関与した人々が築いた土居が現存することは貴重である。

また、その存在は茶産業の近代化過程よりも、むしろ牧之原開拓史の資料として評価される遺構といえる。この点から見ると、土居は土木遺産として継承すべき資質は備えているといえるだろう。

今回は、「土居」の特徴に着目して論を進めたが、実は本稿では「土居消滅の背景と築造工法」については述べていない。今後は稿を改め、これらについても述べる予

定である。

謝辞:本稿を記すにあたり、お茶の郷博物館（金谷町）・堀井直樹氏（現・金谷町役場総務課）には現存箇所や資料についての教示を頂いた。また、㈱医院企画プロジェクト所長・松山哲則氏には実測調査にご協力頂いた。文末ではあるが記して感謝申し上げる。

---

1) 牧之原は、「牧野原」という地名が東海道の日坂と金谷の間にあり、明治4年頃に地籍簿を作成するにあたり全域を牧之原と称するようになった。
2) 御土居は、豊臣秀吉が1591年、外敵の来襲や河川の氾濫から洛中を守るために築いた土塁である。現在は、計9ヶ所にその一部が残っている。
3) 文献⑧参照。
4) 文献⑭参照。
5) 文献⑪や文献⑬でも土居は取上げられていない。
6) 1921年静岡県島田市にて生まれる。1968～77年静岡県茶業試験場長。専攻は育種栽培であるが、茶業について多岐に渡り著書を執筆しており、特に牧之原に関する研究においては、第一人者として認められている。
7) 文献⑤「土居　26頁」。
8) 文献①「牧野原　25頁」。
9) 文献⑨「第二章　三方原の歴史　61頁」、文献⑫参照。
10) 文献⑩「風に備える槙囲い　90頁」。
11) 文献⑤「士族たちの勢ぞろい　13頁」参照。
12) 文献⑤「第二の開拓者たち-川越人足-　29頁」参照。
13) 所有者・長谷川卓郎氏（大正15年生）の教示（1996年9月3日,長谷川家にてヒアリング）、及び文献⑦「入植者と現世帯　213頁」。
14) お茶の郷博物館（堀井直樹氏等）によって1994～1995年に行われた牧之原開拓に関する調査において、旧士族・児島直養の孫にあたる女性（東京都在住。1985（昭和60）年頃までは牧之原に居住）に話を聞いたところ、本文中A-3の土地は元々旧士族が居住しており、農家が後に買い取ったという。
　本文中A-2は、所有者・塚本三一郎氏（大正2年生）の教示（2001年5月11日,塚本家にてヒアリング）。
15) 文献⑤、文献⑦「入植者と現世帯　213頁」参照。
16) 榑林禮一郎氏によると（2001年10月21日,電話にてヒアリング）、榑林家は、旧士族から土地を取得して現在で6代となり、初代にさかのぼると1877（明治10）年前後と伝えられる。
17) 金谷町のお茶の郷博物館（堀井直樹氏等）において『牧の原士族開墾地絵図』（金谷町役場所蔵）などとの照合調査が1994～1995年に掛けて行われたが居住者は明らかにできなかった。このため、士族であると裏付ける資料は無いが、同絵図には全ての居住者が記されているわけではないことも加えておきたい。
18) 塚本三一郎氏の教示（註14に同じヒアリング）。
19) 山岡鉄太郎の率いた精鋭隊の後身。文献③に詳しい。
20) 塚本三一郎氏の教示（註14に同じヒアリング）。
21) 土居の斜向かいに茶畑を持つ丸山氏（昭和4年生）等の教示（2001年5月11日,土居周辺の茶畑で茶摘みを行っている人々にヒアリング。丸山氏のみ姓を教示頂いた。他2名は姓名不詳である）。
22) 文献⑤によると、牧之原周辺が利用されたり、多少の開墾者が士族入植前に存在したようだが、強酸性の土壌と水不足で作物が育たず、居住者は皆無に等しかったという。
23) 実測調査（2001年現在）の許可が所有者から得らなかったため、ヒアリングと見学による。ヒアリングは、1回目が1996年9月7日,榑林家で森猛男氏立会いのもと。2回目が2001年10月21日,電話にてヒアリング。
24) 文献⑤「土居　26頁」。
25) 故大石貞男氏の教示（1996年8月28日,大石家にて夫人立会いのもと文献⑤についての質問）。
26) 土居に芝を植えたもので、これによって強度が得られ、急勾配の角度もつけられる。
27) 塚本三一郎氏の教示（註14に同じヒアリング）。
28) 註21に同じ。
29) 地名については、文献⑥「猪土居・切山　7頁」。
30) 狐の存在は、宮城稔著:『随想　祖父を偲ぶ』（文献⑦）から確認できる。
31) 文献⑤「土居　26頁」。
32) 1869（明治2）年に入植した森盛澄の子孫。昭和8年生。森氏には、1996年9月7日,森家にてヒアリング。
33) 文献⑤「開拓のはじめ－士族の入植－　7頁」
34) 榑林禮一郎氏の教示（1996年9月7日,榑林家で森猛男氏立会いのもとヒアリング）。
35) 長谷川卓郎氏の教示（註13に同じヒアリング）。
36) 文献⑤「土居　P26」、山本治一著:『丹野百年史』,「開拓期195頁」（文献⑦）　参照
37) 気象庁資料によるまとめで、1975～2000年の平均値を用いた。なお、文献⑦「牧之原農業水利事業概要書」（関東農政局牧之原農業水利事務所）によると、昭和元～44年までの統計では最大風速が50.5m/s（昭和41年9月24日）とされる。
38) 文献②「季節別の気候　18頁」。本文中［図5］は「西部非火山地域　13頁」
39) 宮城藤夫著:「牧之原開拓小史　179頁」（文献⑦）による。

参考文献（時系列）

①『静岡県茶業史』静岡県茶業組合聯合会議所,1926（大正15）年
②井出栄二著:『わが郷土　静岡県』,「季節別の気候　18頁」,清水書院,1949（昭和24）年。
③『静岡大百科事典』,静岡新聞社,1978（昭和53）年
④内藤昌著:『城の日本史』,日本放送出版協会,1980（昭和55）年
⑤大石貞男著:『牧之原開拓史考』,静岡県茶業会議所,1981（昭和56）年
⑥山田健治著:『ふるさとつれづれ－金谷町の地名－』,私家版,1985（昭和60）年
⑦布引原町内会長OB会編:『ふるさと百年』,1987（昭和62）年
⑧『建築大辞典　第2版』,彰国社,1993（平成5）年
⑨浜松市立三方原公民館編:『わが町文化誌三方原』,浜松市立三方原公民館,1994（平成6）年
⑩『民家は語る』,大東町教育委員会,1996（平成8）年
⑪文化庁歴史的建造物調査研究会編:『建物の見方・しらべ方－近代土木遺産の保存と活用』,ぎょうせい,1998（平成10）年
⑫「歴史探訪　三方原編　不毛の地に茶園を開墾造成し地域茶業の礎を築いた二人の男の奮闘の足跡を辿る」,『茶道楽　12号』,静岡県茶文化振興協会,2000（平成12）年
⑬土木学会土木史研究委員会編:『日本の近代土木遺産―現存する重要な土木構造物2000選』,土木学会,2001（平成13）年
⑭拙稿:「静岡県の茶産業に関わる建築に見られた日除けについて」,『日本建築学会計画系論文報告集　547号』,2001（平成13）年9月